第１１７回　経営協議会議事録

日　時　令和５年９月１４日（木）１４時００分～１５時２０分
場　所　和歌山大学南１号館（事務局棟）３階共通会議室
出席者　本山学長
清木委員(オンライン参加)、田村委員（議題２より出席)、辻委員、
西平委員、矢倉委員
添田、尾久土、松本、中川、山形　各理事
（柏原監事、足立副学長、マグレビ副学長、藤永副学長、田川教育学部長、
金川経済学部長、野村システム工学部長、大浦観光学部長、満田戦略情報
室長、南方副理事、細野企画課長、猪原財務課長）
欠席者　島委員、下委員

最初に、学長から、新たに経営協議会学外委員に就任いただいた矢倉委員の紹介があった。つづいて、学長から、第１１６回（令和５年６月１９日）の議事録について確認があった。

議　題：

１．国立大学法人ガバナンス・コードにかかる適合状況等に関する報告書の更新について

松本理事から、国立大学法人ガバナンス・コードにかかる適合状況等に関する報告書の更新について、資料１に基づき説明を行った後、細野企画課長より、１週間程度意見照会を実施し、その結果を踏まえ、報告書における「経営協議会による確認欄」を作成し、改めて意見照会を行う旨の説明があった。

（主な質疑や意見）

・報告書公表にあたり、文部科学省に協議する、またはチェックを受ける予定はあるのか。
→これまでと同様、文部科学省や国立大学協会から公表内容のチェックを受けることはなく、そのように求められることもない。国立大学協会からは、更新できるタイミングで各大学が公表するようにとの指示であり、本学においては、慣例として毎年10月末に更新し、HPで公表している。

・ガバナンス・コードの作成名義に、文部科学省・内閣府・国立大学協会が名を連ねていることから、大学の自律性・自主性が阻害されるのではない

かと懸念していたが、内容について文科省への確認はしていないということで、安心した。大学の業務量が大きく増えることが心配であり、教育研究活動に支障がでないように簡潔に対応していただきたい。

２．令和５年度第一次補正予算（案）について

松本理事から、令和５年度第一次補正予算（案）について、資料２に基づき説明があり、審議の結果了承した。

報　告：

１．令和６年度概算要求の状況について

松本理事から、令和６年度概算要求の状況について、資料３に基づき説明があった。

（主な質疑や意見）

・宇宙教育に力点を置いていた宇宙教育研究センターについて、見送りということで、残念であった。和歌山県立串本古座高等学校への「宇宙探究コース」の新設が予定されているなど宇宙への機運が高まる中で、和歌山大学として、この取組において、どのように付加価値をつけなければならないのか。今後の見通しをご教示願いたい。

→当初は、アントレプレナーシップ教育の拡充という形で文部科学省へ概算要求の申請を行ったが、単独で宇宙教育研究を実施するセンターとして独立して立ち上げたほうがいいのでは、と文部科学省から提案を受けて検討を行った結果、共同利用・共同研究推進室を設置し、新たな組織の整備について検討していくこととした。

経営協議会委員の皆様から、面白いものはPRするように指導もいただいているところなので、PRを一つさせていただく。先日、JAXAのHⅡAロケットにより打ち上げられた、月着陸機SLIMの受信機として、本学のパラボラアンテナが使われ、来週20日から試験運用が始まる。近日中に情報発信を行う予定なので、是非取材等していただきたい。

・法人化以降、新たな予算措置を求める際は、概算要求が認められなければならなくなったが、宇宙教育といった機能を発揮するにあたり、概算要求に乗らなくても、既存の組織・予算を活用して、できることから着手してはいかがだろうか。

→現在、今のメンバーでできることを動かしているところである。概算要求で採択されなくても、今の体制でできることをしてきたい。宇宙教育について、県の時流に乗り、これからも大学が中心となり進めていきたい。また、モンゴルコーセンとの協定を締結する予定であり、連携して宇宙教育を進めていきたい。大きな規模になると、概算要求に出さなければ厳しいところもある。

・西２号館の改修について、文部科学省の総合評価Aは良くないと聞いたが、レイアウト等の変更に制約があり、いわゆる通常の要求では認められにくい中で、自分たちで工面するなど、今後の展望はどうなっているのか。

→予算額が億を超えるものは本学の体力では対応が厳しいものがあるので、国の予算に頼れるものは頼るというやり方にしている。古いものから順番にという計画性は持っているが、採択に向けて、機能強化に乗らないものについては、優先順位を下げるなどの検討をしていきたい。

２．令和４事業年度財務諸表の承認について

松本理事から、令和４事業年度財務諸表の承認について、資料４に基づき説明があった。

３．その他

学長より、「わだいフェスタ2023」、「大学案内2024」について紹介があった。また、和歌山大学の概要・展望等について説明があり、意見交換を行った。

（主な質疑や意見）

・地域の中小企業にとって、産官学連携にどのように関与すればよいかわからないところもある。小さな企業には声がかかりにくいのかと思う。

→上場企業への就職や、専門的な職に就くため、東京や大阪に行く学生が多くいる中で、和歌山県内の産業界と議論したうえで、今後の対応について考えていきたい。

・中長期ビジョンを進めていく中で、企業と大学が連携して、和歌山県内に人材をとどめていきたいという趣旨か。

→本学における教育を通じて、和歌山に貢献できる人材を育成できれば良いと考える。また、東京や大阪に就職しても、将来的に和歌山に戻って

くることも含めたキャリア支援を充実したい。

・新型コロナウイルス流行前に、和歌山県から経済界に働きかけがあり、県内企業の合同説明会が開催され、県内就職率が上がったということがあったと聞いている。そういったものを進めていくことにより、学生が、大企業だけでなく、中小企業も知る機会となり、これをきっかけとして就職につながるかもしれない。

・和歌山にとどめるだけでなく、いろんな世界に出て、勉強して、その後、和歌山に戻ってくることで、和歌山にとっても良い人材になるのではないか。

→本学のキャリア支援室における取組を中心として、一度外に出てから、和歌山に帰ってきたい学生についても、しっかりと支援したいと考えている。

・和歌山市で、そのような支援を今年から始めたと聞いている。様々な経済界、行政と一緒になって、和歌山大学としても、そのような学生を支援していければいいと思う。

・大学４年間で、和歌山の魅力に触れて、様々な団体と協力してプロジェクトを行うなど、達成感を感じることができれば、外へ出てからも、和歌山に戻ってきたい、和歌山を良い故郷、帰る場所として感じてもらえるのではないか。わだいフェスタでは、活躍しているOB・OGを見たりして、自分の目標が定まるのではないかと思う。良い試みであると感じた。

→「ホームカミングデー」という名称から「わだいフェスタ」へ名称を変更した。学生と話をしたいという同窓会メンバーや応援している企業の方が多くいる中で、和歌山大学のことを知っていただく機会がさらに必要であり、将来的には、大人版のオープンキャンパスとして、大規模に展開していくことも考えたい。

・人口減少社会の中で、地方は存在感を高めていかなければならない厳しい状況にさらされている。島根県の隠岐島前高校では、高校魅力化に取り組み、話題となった。現地のIターンの方から聞いた印象的な言葉がある。「ブーメランは、思いっきり外へ放り投げると、必ず同じ勢いで戻ってくる」。つまり、地方に人材を囲い込むのではなく、思い切って海外や国内の都会へ行かせる。和歌山で人と関わり、学んだ愛着があれば、何らかの形で帰ってくるのではないか。和歌山の人や企業に関わり、和歌山に愛着をもつ学生が育つために、地域連携プラットフォームが活かせるのではないかと

思う。学生が和歌山にまみれるために、大学が汗を流さなければならない。大学教員が研究成果をどのように和歌山に還元できるか考える場としてプラットフォームを活かし、学生を巻き込むことが成功のカギとなるだろう。学内の教員の意識を高め、プラットフォームに参画させることが必要ではないか。

→ご意見について、各学部長にも共通認識を持ってもらい、全学的に検討していきたい。

・和歌山大学は、県内唯一の国立大学として、行政機関や産業界からの要望や期待が大きいと思うが、それらを背負うだけでなく、大学にとってもプラスになるような形で取り組んでいただけたら良いと思う。

・「大学改革」と30年以上言われてきており、改革の中身が何なのか見えにくくなってきている。改革にあたり、学長のリーダーシップが大事と言われるが、独断的・独善的な大学も見られる中で、「謙虚なリーダーシップ」を掲げることは、優れたご判断だと考える。

以　　上